

一片の悪意

堀田耕介



一片の悪意

いま、ぼくたちには共通の言葉があるのだろうか。八〇年代は終末でさえ甘美だった。ぼくたちはその甘美な終末の懐に、自分たちの甘酸っぱい未来を預けていればよかったんだ。

でも本当に破局が起こってみると、ぼくたちが知ったのは、どんな地獄でも人は生きていかなければならないということだった。まるで中世の戦乱の闇の

中でもがき続けた人たちのように。ぼくたちにもう
共通言語はない。何が生きていることで何が死ん
でいることなのかでさえ、ぼくたちは一致すること
ができない。ぼくたちは現代の混乱バベルを生きている。
そして混乱バベルさえなければ死なずにすんだ、多くの
人々が死ぬだろう。

その予感、九〇年代からあったはずだ。高速道
路が子どももの暴れた後のおもちゃの残骸のように
崩れ、子供騙しの爆弾ごっこがいつの間にか毒ガス

の戦場に変えられたときに。それでもぼくたちは平気な顔をして、強張った笑顔で日常は続いて行くフリをした。大袈裟に破滅を叫んでみても、ぼくたちはまだぼくたちの力を信じていた。

流れが変わったのはジェット機が双子のビルに突っ込んだあの9月の熱い日だったのだろうか。ぼくたちは世界が、巨大な悪意の中にいることに突然気づいた。頭越しの大ボスたちの取引が甘美な終末の音楽を奏でていたあのころから、ぼくたちはもう

本当に遠くに来てしまったのだ。世界は破滅させられる、そう一片の悪意で。悪意が悪意であることにぼくたちは気づかないふりをしていただけなんだ。悪意は遠い昔に、そう一九四五年度のベルリンで総統官邸が爆破された時に、ともに消え去ったはずだったのに。

しかしストーリーは反転した。ぼくたちはぼくたちの顔をした悪意に向き合うことになった。九〇年代は予感に過ぎなかった。しかし二〇〇一年にそ

れは――

ぼくたちはこの世界を悪意とともに生きていかなければならないことに気づかされたのだ。

それからのはあつという間だった。悪意には悪意をもつて応えるというバビロニア以来の古い掟の鐘が打ち鳴らされ、世界の心を震わせた。誰もその響きを止められない。人はどんなことでも取引可能だと思っていたのだ。その取引材料に過ぎなかった対立たちが、悪意の応酬であるという相貌かおをのぞか

せた。それが本当の相貌だったのか、それまでの相貌に仮面をかぶっただけなのか。分からない。どちらも正しくどちらも間違っている。鵜のように二つの相貌をもつ怪物。一つの口で取引を求め、もう一つの口で憎悪を吐き散らしている。ぼくたちはあつという間に悪意に慣れていった。悪意に首までつきりながら、ぼくたちは平気な顔で世界を泳ごうとしている。皮膚から染み込んで来る、口にしたら直ちに死に至る、どす黒い渦の中でぼくたちは笑いさえしている。

もはや悪意のない世界は考えられない、悪意には悪意で戦うことが現実主義だと叫ぶ、その相貌かおは本当の相貌かおだろうか。それとも取れなくなってしまうた仮面だろうか。エドガー・アラン・ポーの舞踏会の、黒い仮面のように。

何も怖くはない、人の心より怖いものはないから、とぼくの横で笑う美しい人がいた。それは予言のようにも聞こえたのだけど、今はもう予言ではない。

美しかった人がそうでなくなつて行くのと同じような早さでは、美しかった人の実現された予言が消え去ることはない。

こわいものは何？—七色の放射能。

こわいものは何？—百メートルの大津波。

でも本当にこわいものは、人の心に棲んでいる。

人の心に棲んでいる誰かが、こちらを振り向く前に。

一片の悪意

<http://p.booklog.jp/book/44751>

著者：堀田耕介

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/kous37/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/44751>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/44751>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.